

されていない。そこで、今回、我々は、当科の入院患者のうち、SLEの疑われた23例にLBTを施行し、その結果を、臨床所見との関連において検討したので報告する。

対象：当科に入院した腎疾患患者23名を対象とした。内訳は女性17名、男性6名である。

方法：前腕伸側部、顔面などの露出部、および、臀部、下腹部などの非露出部の皮膚を生検し、即座に凍結した組織をクリオスタットにて凍結切片とした。直接蛍光抗体法にて、IgG, IgA, IgM, C_{1q}, C₃, C₄, フィブリノーゲン、プロパージンについてその染色性を検討した。

結果：LBTを実施した23例のうち、臨床的にSLEと診断されたものは12例であり、このうち9例はLBT⊕、3例はLBT⊖であった。臨床的にSLEでないと診断された9例(MCTD 2例、ネフローゼ2例、PSS 1例、慢性腎不全2例、慢性関節リウマチ1例)は全例がLBT⊖であった。臨床的に診断が確定しない2例では、1例がLBT⊕、1例がLBT⊖であった。上記の如く、SLEにおけるLBT陽性率は9/12=75%。偽陽性は0%であった。

考察：SLEはその臨床所見が多岐にわたり、他の膠原病との鑑別診断がしばしば困難である。今回の結果では、SLE以外の疾患でLBT⊕となるものはなく、本法はSLEの診断にきわめて有用であると考えられる。

10. 大腿骨頸部骨折の治療経験

(整形外科)

○三宅 俊和・土方 浩美・豊島 弘道・
下出 真法・田川 宏

近年平均寿命がのび、それに伴って老人の整形外科的疾患も増加し、高齢者の大腿骨頸部骨折を治療する機会もふえてきた。そこで昭和53年11月～昭和58年12月に当科で治療した大腿骨頸部骨折113例中100例を頸部(内側)骨折、転子部骨折に分けて検討してみた。

両骨折とも50歳以上に多く、70～75歳にピークがみられた。合併症は72%の症例にみられた。糖尿病、高血圧・心疾患、脳血管障害、精神障害など多彩で、重複例もみられた。

観血的治療は81例に行ない、合併症のために手術不能例は3例であった。

頸部(内側)骨折(57例)ではstage II, III, I (Gardenの分類)の順に多くみられ、stage II, IIIでは人工骨頭、compression hip screenで治療され、stage Iでは保存

的またはknowles pinningで治療されていた。

転子部骨折ではstable type (Evans分類)が多くstable type, unstable typeともにcompression hip screenで治療されていた。

術後成績では両骨折ともにcompression hip screenがすぐれていた。

11. 石灰乳胆汁の1例

(外科)

○町田 浩道・三橋 牧・土生 洋一・
瀬下 明良・安部 龍一・村田 順・
中川 隆雄・大地 哲郎・木村 恒人・
馬淵 原吾・鈴木 忠・倉光 秀麿・
織畑 秀夫

石灰乳胆汁は従来、比較的まれな疾患であるとされている。今回われわれは、腹部単純撮影にて、胆嚢陽性像を呈した典型的な2例を経験したので報告する。

症例1：7歳、女児。右上腹部痛を主訴に入院。腹部単純X線撮影にて右季肋部に石灰化像有り。胆嚢造影で胆嚢内に結石を認めた。また、血液検査より球状赤血球を指摘された。石灰乳胆汁、胆石を合併した遺伝性球状赤血球症と診断し、胆摘、脾摘術施行。胆嚢内に石灰乳胆汁および胆石を認め、胆石は頸部に入り込んでいた。脾臓は腫大し、暗赤色を呈していた。

症例2：24歳、女性。右季肋部痛を主訴に入院。発熱、黄疸なし。腹部単純X線撮影にて、右季肋部、胆嚢に一致する部に石灰化像を認めた。同陰影は体位による変形はない。胆嚢造影で胆嚢内へ造影剤の侵入はなかった。以上より石灰乳胆汁の診断で胆摘術施行。胆嚢は全体に萎縮し、胆嚢内に黄白色、ゴム様軟の内容物を認めた。内容物の化学分析にて炭酸カルシウムが90%以上であった。

12. メッケル憩室の腸間膜欠損による絞扼性イレウスの1例

(外科)

○三橋 牧・土生 洋一・町田 浩道・
瀬下 明良・安部 龍一・村田 順・
大地 哲郎・木村 恒人・馬淵 原吾・
鈴木 忠・倉光 秀麿・織畑 秀夫

メッケル憩室はメッケルにより、胎児性腸間膜管の不完全閉塞による奇形であると報告されて以来、比較的多数の症例が報告されている。メッケル憩室の外科的合併症として腸重積その他の腸閉塞、憩室炎、嵌頓ヘルニアなどがある。今回私達は、メッケル憩室の腸間膜に欠損を認め、その欠損部に小腸が嵌頓し、絞

扼性イレウスを形成した症例を経験したので、文献的に考察を加え報告した。

13. 円錐部 VSD の非観血的診断法による臨床的検討

(循環器小児科) ○沢田 陽子・高尾 篤良

我々は、過去5年間に心研に心カテーテル検査又は手術入院した円錐部 VSD, 89症例に対し、心電図、胸部 X-P, 心音図による臨床的検討を行なったので報告する。

円錐部 VSD は、右室円錐部筋肉の支持が欠損しているため、バルサルバ洞が VSD を通して、右室側へ突出して、そのため大動脈弁閉鎖不全を起こしうる疾患であり、閉鎖不全が出現した後悪化は速く、時に大動脈弁置換を要するため、日常診療の上で同疾患の早期発見は重要である。

同疾患を年齢的に見ると、Aortic Cusp の変形もしくは大動脈閉鎖不全の出現は3～8歳頃に多く、さらにバルサルバ洞破裂は20歳以上に多い。Shunt 量の多い症例では肺高血圧症を伴い乳児期から心不全症状が出現する。心電図所見では前額面 QRS 平均軸は30°～90°に分布している。胸部 X-P 上、高度の心拡大を呈することは少なく、L→R shunt 率も50%以下が多いため左第2弓の突出も著明でない。心電図、X-P は特徴的所見は少ないが、聴診所見は臨床的意義が大きい。つまり心雑音の最強点は胸骨左縁第2～3肋間と、膜性部 VSD や筋性部 VSD より位置が高い。したがって VSD 患児で心雑音最強点が第4肋骨より高い場合、円錐部 VSD を疑い検査を進めるべきである。心雑音の性状を見ると同疾患の40%の症例で、汎収縮期雑音を聴取する。さらに、同疾患に特徴的な後期収縮期雑音は30%の症例で聴取され、この場合 L→R shunt 率は20%前後であることが多い。また閉鎖不全が生じた場合、拡張期雑音を聴取する。しかし、初期のわずかな閉鎖不全では明瞭な拡張期雑音を聴取されないことが多く、心音図上でも明らかな拡張期雑音を認めた時点では、II°度以上の閉鎖不全を呈していることが多い。

円錐部 VSD では日常診療において大動脈閉鎖不全の有無に留意すべきであり、それには聴診所見が有効である。

14. 胃癌患者における SU-PS 皮膚反応の有用性について

(第二病院 外科)

○小川 智子・矢川 裕一・小川 健治・大谷 洋一・川田 裕一・成高 義彦

湖山 信篤・芳賀 駿介・梶原 哲郎・梶原 宣

近年、胃癌に対する治療として免疫療法が注目されている。しかし、その効果については不明点が多く、その上、免疫能を的確にとらえるパラメーターについても、いまだ確立されていない。そこで今回我々は、SU-PS 皮膚反応が胃癌の進行度に伴う免疫能の変動を反映するかどうかを確認の後、OK 432による免疫療法の効果、およびその指標としての SU-PS 皮膚反応の有用性について、PHA 幼若化反応、末梢リンパ球数、PPD 皮膚反応等のパラメーターと比較検討した。術前における胃癌進行度別の SU-PS 皮膚反応をみると、stage が進むに伴って有意に低下しており、他のパラメーター同様に進行度による免疫能の変動をよく反映している。次に、SU-PS 皮膚反応の術前術後の変動を、OK 432投与群と非投与群に分けて検討した。stage I-II では、OK 432投与の有無にかかわらず術後やや上昇しており、早期の胃癌では術後も細胞性免疫能がよく保たれていることを示している。stage III を治癒、非治癒切除例に分けてみると、OK 432投与群では、他のパラメーターが非治癒切除例で術後やや低下を示すのに対し、SU-PS 皮膚反応は両者ともに術後上昇し、また非投与群では低下傾向を示しており、OK 432の効果がよく表われている。stage IV を非治癒切除例、非切除例に分けてみると、他のパラメーターでは両者とも術後低下を示すのに対し、SU-PS 皮膚反応は、OK 432投与群で stage III と同様の変化がみられる。

以上の結果より、SU-PS 皮膚反応は他のパラメーターと同様に、担癌生体の進行度による免疫能の変動をよく表わしている。また、OK 432に対する反応性も stage にかかわらず高く、OK 432の指標として有用であると考えられた。

15. 小児脳底動脈閉塞症の1例

(第二病院 脳神経外科)

○田中 典子・高木 宏昌・山本 昌昭・神保 実

はじめに：椎骨脳底動脈系の閉塞性疾患は、小児では比較的稀である。最近われわれは、けいれん発作で発症し、経時的 CT で興味ある所見を呈した、小児脳底動脈閉塞を経験したので報告する。

症例：12歳、男児。既往歴、及び家族歴に特記すべきものはない。昭和58年11月4日、マラソンの最中に突然意識消失と左半身の強直性間代性けいれんを起こし、某院へ緊急入院となった。覚醒時、視野障害が指